

ダウン症候群の社会性の特徴について

金野 楓子 東京学芸大学大学院教育学研究科

要 旨：本稿は、ダウン症児・者の社会性に関する先行研究を概観することを通して、ダウン症児・者の社会性の良好さと、社会性の発達の遅滞や対人関係における困難が見られるという両側面の指摘があることについて、その原因を検討した。その結果、①ダウン症児は社会性の発達が定型発達児と同様であり良好に見られるが、物よりも人に志向するために課題自体の解決をしていないという困難さも見られること、②日常の中で状況が理解できないときに、「愛嬌の良さ」によりその状況を回避していること、③「愛嬌の良さ」の背景に言語面の問題や自己選択の未経験があるまま年齢が上がり、それに伴ってダウン症児・者に対する周囲の評価が変化すること、あるいはそのような環境の変化が影響してダウン症者自身が不適応行動を示すことの3点が示唆された。この中でも特に③については、実証的な研究がなされていないため、今後さらに検討していく必要がある。

Key Words： ダウン症児・者、社会性、文献検討

● はじめに

ダウン症児の発達全般における社会性の領域の特徴について、岡崎裕子・池田由紀江(1985)³⁰、岡崎裕子・池田由紀江・長畑正道(1986)³¹、菅野敦・池田由紀江・上林宏文・大城政之・橋本創一・岡崎裕子(1987)¹¹は津守式乳幼児精神発達検査法により明らかにしている。岡崎ら(1985)³⁰は生活年齢(以下、CA)2.2カ月から19.8カ月までのダウン症児に対して津守式乳幼児精神発達質問紙による調査を行い『社会』の発達は3か月から18か月まで安定して良好な発達を示した。」と指摘している。しかし、CA15.6カ月から62.0カ月までのダウン症児に対して同検査を行った岡崎ら(1986)³¹は、「社会」の領域の中の「おとなとの相互交渉」と「子どもとの相互交渉」は良好とは言えないとしており、菅野ら(1987)¹¹は、CA3歳から8歳までのダウン症児に対して同検査を行い、「社会」の領域はどの年齢段階においても低い発達を示す領域であったと指摘しており、岡崎ら(1985, 1986)^{30/31}の研究結果と比較して、『社会』は36か月以前では他の領域よりやや優れた発達を示しているが、36か月以降に次第に遅れていく」としている。そして、この理由として「社会」の項目では、「人と一緒に見立て

遊びをしたり、友達同士の中でルールを理解して遊ぶなど、いわゆる認知的能力を多く要求されたため、認知発達の遅滞が顕著である彼らにとって、遅滞の著しい領域となった」と指摘している。これらのことから、発達全般における対人関係に関わる領域である「社会」は、ダウン症児にとって必ずしも良好ではないことが考えられる。

建川博之(1968)³⁷は、性格的特性として、ダウン症候群と統制群を比較し、差が顕著に見られた項目として「陽気で朗らかである」、「人の言いなりになる(お人好し)」、「愛嬌がある(おどけている)」、「人なつっこい」の項目を挙げている。また、Grieco J, Pulsifer M, Seligsohn K, Skotko B, and Schwartz A.(2015)⁴¹は、ダウン症児は「愛嬌のある」「優しい」「朗らかな」「社会的である」と共通理解されていて、優しさ、ユーモア、寛大さを含んだ性格的な強みがあるとしている。これに対して岡崎裕子(1991)²⁹は、パーソナリティ特性研究における「愛嬌がある」などの記述が、ダウン症児の社会性は発達良好な領域であるという一般的印象の形成に影響しているが、大人との関係は非常に密であっても、子ども同士の相互交渉が少なく、仲間関係の広がりには不十分さがあると指摘している。これらのことから、一般的な印象としては良好であるが、菅野ら(1987)¹¹の指摘するように実際

には友だちとの関係づくりなどに困難さが見られることが考えられる。

また、建川(1968)³⁷⁾はこのような一般的に指摘される性格的特性に加えて、「愛嬌がある(おどけている)」と「ひとなつつこい」という項目については、0～10歳の年少群が比較的高く、11歳～20歳の年長群になると急激に低くなっていることを明らかにしており、年齢による変化があることが考えられる。伊麗斯克・菅野敦(2012a)³⁸⁾はダウン症児・者の「対人関係」に関する課題を先行研究からライフステージ別に整理している。その結果、乳幼児期においては、「他者への注意・関心の少なさ」、「消極的な他者との関わり方」、「対人場面での意思疎通の困難」を挙げている。また児童期・青年期においては、乳幼児期の「消極的な関わり方」として現れるものが青年期になって、「一人で過ごす傾向」や「他者との関わりの狭まり」となり、一段の深刻化が見られるとしている。成人期には、乳幼児期・児童期・青年期を引き継ぎ、「消極的な関わり方」、「意思疎通の困難」、「感情を表す」ことが多くなる、「集団の中で自己中心的である」こと、「他者からの干渉を拒む」傾向があるとしている。これらのことから、比較的幼児期や学齢期には良好さが指摘されるが成人期には困難さが指摘されていること、乳幼児期においてもその後の他者との消極的な関わりに通ずるような様子が見られていることが考えられる。

これらのことについて、橋本創一(2013)⁷⁾は、幼児期や児童期はポジティブな特性として捉えられることが多いが、青年期以降は周囲からの期待の大きさや年齢相応のことを要求されるために、ネガティブな傾向が強調されると述べている。また、伊麗斯克・菅野敦(2012b)³⁹⁾はダウン症児・者には「対人関係」における課題が見られるため、「社交的」という印象は必ずしも適切ではない可能性があり、もっと多くの要因を取り入れた検討が必要であるとしている。以上のことから、良好さと困難さは周囲の捉え方によっても異なり、良好さとして考えられてきた面も捉え方によっては困難さである可能性があるため、良好さについて再度見直す必要がある。

そこで本研究では、ダウン症児・者の社会性に関する先行研究を概観することを通して、従来指摘されているダウン症児・者の「愛嬌の良さ」などの社会性の良好さと、菅野ら(1987)¹⁾の指摘する「社会」の発達の遅滞や伊麗斯克ら(2012a)³⁸⁾の指摘する困難が見られるという両

側面の指摘があることについて、その原因を明らかにすることを目的とする。

● ————— II. ダウン症児の社会性に関する記述について

ダウン症児の社会的な発達とは定型発達児と同様の形であるが、定型発達児には見られない質的差異がある(Grieco et al.;2015)⁴⁾とされている。ダウン症児のこれらの質的差異を明らかにすることで、社会性に関する良好さと困難さが見られる要因を検討することができると考え、本項では、国内外のダウン症児の社会性に関する文献において見られる定型発達児とダウン症児の共通点と差異点について整理することを通して、ダウン症児の社会性の特徴を明らかにする。また、社会性については研究者間での統一した定義はないが、自他の分化から始まる他者理解の発達を重視する立場がある(久保ゆかり;2017)¹⁹⁾。他者意図理解の発達について、黒木美紗・大神英裕(2003)²¹⁾、大神英裕(2002)³²⁾は生後6カ月から18カ月までの行動を整理している。本研究においては、黒木ら(2003)²¹⁾、大神(2002)³²⁾における領域名及び項目名を参考に、「指さし・共同注意」、「社会的参照」、「模倣」、「共感」について検討を行うこととする。

調査対象は、国内外の学会誌及び国内の大学紀要とした。対象となる先行研究の抽出方法は、タイトルに「ダウン症(Down syndrome)」及び「指さし(pointing)」、「共同注意(joint attention)」、「社会的参照(social reference)」、「模倣(imitation)」、「共感(empathy)」のいずれかを含み、定型発達児との比較について述べているものとした。対象期間は、Lejeune,Jがダウン症候群の原因を染色体異常であるとし症候群として発表した1959年から2018年までとした。対象となった17件の文献について、キーワード別に著者、発行年、対象者、定型発達児とダウン症児の共通点及び差異点を整理し、Tableに表した(Table 1)。

「指さし・共同注意」のキーワードに該当した文献について、発達年齢(以下、DA)7～26カ月の定型発達児と同様に指さしの表出と指さし自体の理解が見られた。差異点としては、DA7～26カ月時に指さされた対象を的確にとらえることが難しいという注意の問題が挙げられた。また、精神年齢(以下、MA)17カ月時に、自らおもちゃを選択することよりも養育者からの働きかけに注意を向けることが多く見られることが

Table 1 ダウン症児における社会性の特徴

キーワード	著者(年)	対象者	定型発達児とダウン症児の共通点	定型発達児とダウン症児の差異点
指さし・共同注意	A E. Johnら (2010)	平均DA29.4カ月のWS児33名、同DAのDS児25名	・TD児と同様に、WS児とDS児は能力的に一番上の課題において指さしの意図を理解できた。	
	F Francoら (1995)	CA21~47カ月のDS児22名	・DS児はTD児と同様のタイミングでジェスチャー前にチェックし、相手の参加を確認する必要性を認識している	
	古賀 (2002)	DA7~26カ月のDS児15名、同DAのTD児37名	・TD児もDS児も同じように指さしをしたり、指さされたおもちゃを手渡した	・TD児は正確におもちゃを手渡したがDS児は間違っただけで、対象を正確に捉える認知発達が遅れるか視点の転換が難しい
	E Seageraら (2018)	CA17-23カ月のDS児25名、CA9-11カ月のTD児30名	・DS児とTD児の母親において、母親の相互交渉のスタイルに有意差はなく、どちらのグループも共同注意に違いはなかった	
	L J. Hahnaら (2018)	11文献	・DS児はTD児と同様の共同注意を示し、DD児およびASD児よりも高い共同注意を示した	
	S H. Landryら (1989)	MA8.1~12カ月のDS児14名、同MAの高リスク早産児14名		・DS児が、自分が遊んでいた玩具とは異なる玩具に注意を向けられなかったときに、操作性が低いだけでなく全く反応がなかった
	S Harrisら (1995)	平均MA17カ月のDS児28名、同MAのTD児17名		・DS児はTD児よりも、自ら選択したものではなく養育者が選択したおもちゃに対してより多くの注意を維持した
社会的参照	Kasari Cら (1995)	平均MA17.8カ月のDS児35名、同MAのTD児23名	・TD児と同様に社会的参照が見られた	・TD児よりもDS児は人と刺激の間の注意の切替が少なく、DS児は物的刺激よりも社会的刺激を好むと考えられる
	A J Thurmanら (2013)	CA42~71カ月齢のDS児20名、同CAのWS児20名	・TD児と同様にDS児は大人が楽しいメッセージを伝えたときに、社会参照課題において前向きな行動を示した	
模倣	I Wrightら (2006)	平均DA14.8カ月のDS児18名、同DAのTD児18名	・TD児よりもDS児は、物が隠されなかったときに隠す行動を模倣しようとし、模倣できた	・DS児はTD児よりも物の探索を妨げられたときに効果的に探さず、探索と遊びの行動は模倣に依存した
	S Libbyら (1995)	MA25-35カ月のASD児10名、同MAのDS児10名、TD児10名	・TD児と同様にDS児は、正しい順序でモデルが提示されたときには比較的うまく模倣した	・モデルの順序が変えられたときDS児には難しく、順序を修正する傾向があった
	M Rastら (1995)	CA20~43カ月のDS児48名	・TD児と同様にDS児においても延滞模倣が示された	・延滞模倣は見られたが高水準の物の永続性に失敗したため、同時発生しなかった
	M Nielsenら (2010)	32~98カ月のASD児22名、同CAのDS児12名	・DS児、ASD児はTD児と同様に過剰模倣が見られる	
	M. Vanvuchelenaら (2011)	平均非言語性MA22カ月のDS児20名、同MAのMR児15名	・DS児は同MAのTD児と同じレベルの模倣が見られる	
	齊藤ら (1987)	DA9~35.5カ月のDS児24名、同DAのTD児24名	・DS児は即時模倣においてはTD児と同じか、もしくはそれ以上であった	・TD児と比較して早くから遅れが見られ、特にDA2歳台で遅れが顕著になり、その原因の一つに象徴機能の未成熟が考えられる
共感	C Kasariら (2003)	平均MA51カ月のDS児30人、同MAのMR児22人、TD児22人	・TD児と同様にDS児は、相手に目を向け慰めを提供することで他者の苦しみに応じた	・人形劇による仮定的な共感状況では、DS児はTD児より主人公として同じ感情を感じる様子は見られなかった
	松島 (1986)	CA0~2歳のDS児48名	・TD児と同様に情動反応としての共感が見られる頃に、社会的参照が見られた	

挙げられた。「社会的参照」のキーワードに該当した文献について、MA17カ月の定型発達児と同様に社会的参照が見られた。差異点としてはMA17カ月時に物よりも人への志向が強いため視点の切り替えが少ないことが挙げられた。

「模倣」のキーワードに該当した文献について、DA、MAが9～35カ月の定型発達児と同様に模倣が見られ、差異点としては、MA14カ月時に物の探索が少なく模倣に依存すること、DA9～35カ月時に表象の問題があることが挙げられた。「共感」のキーワードに該当した文献について、MA51カ月の定型発達児よりも共感的な行動が多く見られ、差異点としては、MA51カ月時に仮定的な場面では、定型発達児よりも共感性が見られないことが挙げられた。

全てのキーワードに関する論文が、MA、DAを統一した定型発達児と同様に見られた。ダウン症児は他障害種よりも定型発達児と同様に社会的相互交渉が多く見られ(Kasari C. and Sigman M.:1996)¹⁶⁾、このような特徴がダウン症児の非常に社会的であるという従来の見方に関与している(Fidler J.D., Ballet C.K., Most D.:2005)²⁾とされていることから、定型発達児と同様に模倣や共感などの行動が見られることが社会性の強さという印象に繋がると考えられる。

差異点としては、MA14カ月頃に「指さし・共同注意」、「社会的参照」、「模倣」のキーワードにおいて物よりも人に志向することが挙げられた。また「共感」が人形劇による仮定的な状況では見られないという点についても、人に対しての志向が強くと共感的な行動ができるが、人形という物に対しては見られないということが考えられる。Ruskin E. M., Kasari, C., Mundy P. & Sigman, M.(1994)³⁴⁾は、MA16カ月の定型発達児よりも対物遊びよりも大人との遊びに多く集中すると指摘している。これらのことから、MA1歳を過ぎたころから人との関わりに依存するという質的な差異が見られると考えられる。

さらにKaari C. and Freeman S.F.N.(2001)¹³⁾は、このような物よりも人への志向が強いことについて問題解決場面において使用していると指摘している。そしてそのような場合、問題自体を解決せずに人に志向することでその場面を通過しようとするために、学習の機会を妨げられ、必ずしも快活さがあるわけではないがとても社会的で愛情深いという従来のダウン症児の認識に合致するとしている。これらのことから、ダウン症児の社会性について、定型発

達児と同様に見られるために良好さという印象に繋がるが、一方で人へ志向することで課題を解決していることが影響して困難さとして見られることが予想される。そこで次項では、ダウン症児に見られる愛嬌の良さなどの社会的スキルを難しい場面からの回避のために使用していると指摘している先行研究について具体的な内容を概観する。

●

Ⅲ. ダウン症児に見られる社会的スキルの誤用による回避行動について

Kasari et.al.(2001)¹³⁾と同様の報告をしているものに、Wishart G.J.(1993)⁴²⁾、Pitcairn T.K. and Wishart G.J.(1994)³³⁾がある。Wishart(1993)⁴²⁾は0歳から3歳のダウン症児とMAを統制した定型発達児を比較し、ダウン症児には、検査者である大人をじっと見つめるなどの社会的スキルを用いた「難しい課題に対する回避行動」が見られたとしている。そして、このような社会的スキルの使用は誤用であるとしている。また、Pitcairn et.al.(1994)³³⁾は3歳から5歳のダウン症児とCA、MAを統一した定型発達児を比較し、Wishart(1993)⁴²⁾と同様にダウン症児には大人を見つめたり、おどけた振る舞いをしたりすることで課題を回避する行動が見られると指摘している。そしてこの回避する行動は現在の発達のレベルの少し上のレベルの課題を避けるために使われていることから、学習者としては貧しさがあると指摘している。Kasari et.al.(2001)¹³⁾は、Pitcairn et.al.(1994)³³⁾の研究を踏まえて、5歳から12歳のダウン症児とMAを統一した知的障害児、定型発達児を比較し、ダウン症児は学齢期の段階になっても社会的スキルの誤用が見られることを明らかにしている。

おどけるという行動について、栗林万葉・岩立京子(2015)²⁰⁾は、「対人関係を良好にしたり、ストレスを緩和させたりする効果がある」と指摘しており、おどけるという行動自体は相手との関係を良好にする働きをもつ行動であると考えられる。しかし、状況の理解や指示の意味の理解が難しい場面においてこのような対人関係を良好にする行動を行うことに対して「魅力的であるが、課題には不適切である」(Pitcairn et.al.:1994)³³⁾という指摘があり、やはりこれらの行動は、難しい課題から逃れるための「社会的スキルの誤用」であると言える。

また、菅野敦(2008)¹²⁾はこのような社会的スキルの誤用による回避行動について、「ダウン症の人たちは、日常会話が困らない程度に話ができている人の中にも、言語が概念として理解できていない場合が多いように思います。ただ概念として理解できていなくても日常的な動きは、まわりに合わせてできるので、『わかっている』と解釈されてしまいがちです。さらに、困ったときにニコッと笑うことで済ませてしまうこともあります。ニコッと笑うことは、一般的には『わかっていますよ』というサインですが、彼らはそれで、状況がわかっていないことから免れてきた経験を、これまでたくさん積み重ねてきたのではないのでしょうか。」と指摘している。このことから、Wishart(1993)⁴²⁾、Pitcairn et.al.(1994)³³⁾、Kasari et.al.(2001)¹³⁾の研究に見られる社会的スキルの誤用による回避行動が、実験場面だけでなく日常的な状況の理解が難しい場面においても行われている可能性が示唆される。

それでは、日常的にこれらの行動によって状況の理解ができていないということから免れるという経験を積み重ねることは、後にどのような影響を及ぼすのであろうか。菅野(2008)¹²⁾は、さらにこのような成人期以前に見られる社会的スキルの誤用に関して成人期の問題の一つである「急激退行」と関係していると述べている。そこで次項では、これらの社会的スキルの誤用に関して、成人期の問題との関係について述べている先行研究を概観していく。

●

IV. 成人期ダウン症者の不適応行動と社会的スキルの誤用による回避行動との関係について

菅野(2008)¹²⁾は社会的スキルの誤用に対して「彼らの人づきあいのよさというか、人なつっこさを私たちが誤解してとってしまい、言語の基本的な概念を育ててきたのにこなかったのではないかと指摘しており、このような社会的スキルの誤用による回避行動に周囲は気づかずに接しており、言語の概念を育てられないままになっていることが考えられる。長崎勤・森村茂・切封由紀子・嶺野恵美子(1989)²⁷⁾は、遊びのルールなど、状況が理解できない場面でのダウン症児の応答として、他者からの働きかけに対し拒否をする「拒否的応答」、他者からの働きかけへの応答が不十分である「消極的応答」が

見られるとし、状況を理解できるように支援することで適切な応答が増加することを明らかにしている。このように、おどけるなどの社会的スキルの誤用による回避行動だけではなく、明確に拒否をするような形での回避行動や、応答せず反応を示さないという形での回避行動が見られる。これらの行動は問題として明確であるため、適切な行動へ変容させるための支援が考えられてきた。しかし、おどけるという行動は従来良好さとして捉えられてきたために、養育者は社会的スキルの誤用による回避行動に気づかずに接しており、支援の必要性を感じていない可能性がある(Wishart G.J.;2007)⁴¹⁾。

さらに、菅野(2008)¹²⁾は「成人期になったときに起こるさまざまな環境の変化、お父さんは単身赴任なんだよ、お兄ちゃんは就職したんだよ、おじいちゃんが亡くなったんだよといくら言ってもその状況が概念的に理解できず、その結果、不適応な状態を起こすことがあるのではないかと指摘していることから、このような行動を積み重ねていった結果、成人期になって言葉で説明しても概念的に理解ができず、不適応行動を起こすと考えられる。

菅野(2008)¹²⁾の指摘と同様の指摘をしている文献に、常田秀子・古屋喜美代・西本絹子・田口久美子・長谷川明弘・浜谷直人・吉川はる菜(2002)³⁹⁾、小崎太陽・坂本彩・黒田吉孝・白石恵理子・久保容子・栗本葉子(2009)¹⁸⁾の指摘がある。小崎ら(2009)¹⁸⁾は成人期になって不適応行動を見せた8名のダウン症者について、生涯発達の視点からその原因を事例的に検討している。そして不適応行動が見られる以前には「周囲から可愛がられ、一見問題なく過ごしていた」という保護者や教師の言葉から、成人期以前の愛嬌のある姿に焦点を当てている。具体的には、ダウン症児・者には社会的スキルの誤用による回避行動と同様の行動が見られるとしており、これらは他者や他者の賞賛に依存した行動であるとしている。そして、この社会的スキルの誤用による回避行動を積み重ねることは自我が未発達のまま成人期を迎えることに繋がり、成人期に他者からの賞賛が得られなくなることで、結果として不適応行動が現れるとしている。また、常田ら(2002)³⁹⁾は、学齢期のダウン症児に見られる不適応行動を事例的に検討し、遊びの状況が理解できないときに「愛嬌の良さ」であるふざけるなどの行動が見られ、社会的スキルの誤用による回避行動と同様の行動が見られることを明らかにしている。

そして「指導員からの注目や承認に関心が焦点化しやすいため、指導員との関係を支えに主体的活動の幅や仲間関係を広げることが比較的困難なこと、他者からの注目への過度の関心の累積から他者評価に影響されやすい自己概念が形成されること、これらが複合的に関連して高学年時のいら立ちやストレス反応を導いている可能性が示唆された」と指摘している。常田ら(2002)³⁹⁾は成人期について述べているわけではないが、社会的スキルの誤用による回避行動により自己選択する経験の機会が失われ、年齢が上がると不適応行動が現れるという小崎ら(2009)¹⁸⁾の指摘と同様の指摘が見られた。McGhee P.E.(1999)²⁵⁾は、おどけるという行動は賞賛などの好ましい反応を得たいという欲求から生じるとしており、この行動に対して周囲からは年齢が上がるにつれて、分別をもたないと子どもっぽい、未熟であるとみなされることも指摘している。このことから、おどけるという行動は他者からの賞賛を得る目的で使用されることがあるが、年齢相応ではない行動として捉えられた場合、賞賛は得られず未熟であるとみなされる可能性が考えられる。また、橋本(2013)⁷⁾は、ダウン症者は成人期には周囲からの期待の大きさや年齢相応のことを要求されるなどの環境の変化があると指摘し、伊麗斯克ら(2012b)⁹⁾はそのような環境の変化を受けて成人期のダウン症者の行動には変化が現れるとしている。これらのことから、常田ら(2002)³⁹⁾と小崎ら(2009)¹⁸⁾が指摘しているように、ダウン症児がこれまで良さとして語られてきた「おどける」という行動をすることで、状況が理解できないことから逃れ、他者からの肯定的な評価に合わせて行動している場合、賞賛を受けられなくなった時に深刻な不適応症状を引き起こすことが予想される。

以上の常田ら(2002)³⁹⁾、菅野(2008)¹²⁾、小崎ら(2009)¹⁸⁾を踏まえて、Wishart(1993)⁴²⁾、Pitcairn et.al.(1994)³³⁾、Kasari et.al.(2001)¹³⁾の指摘に見られる社会的スキルの誤用による回避行動と同様の行動が見られ、そのことに周囲が気づいていない可能性があること、これらの行動の積み重ねによって不適応行動が見られることが考えられる。また、菅野(2008)¹²⁾の指摘と常田ら(2002)³⁹⁾、小崎ら(2009)¹⁸⁾の指摘における違いとしては、成人期に不適応行動が起きる原因を言語的な概念の理解の積み重ねがなされてこなかったことに求めるか、周囲に合わせるのみで自己選択をすると言う経験の

積み重ねがなされてこなかったことに求めるかという点が挙げられた。

● V. 考察

本研究では、従来指摘されているダウン症児・者の社会性の良好さと困難さに関する両側面の指摘があることについて、先行研究を概観することを通してその原因を明らかにすることを目的とした。これらの先行研究の概観を通して、ダウン症児・者の社会性について良好さと困難さが述べられている理由として、①ダウン症児は社会性の発達が MA を統一した定型発達児と同様であり、良好さとして見られるが、一方で物よりも人に志向するために課題自体の解決がなされないという困難さが見られること、②良好さとして従来語られてきた「愛嬌がある」という行動は、日常の中で状況が理解できないときにその場面から回避するために使用されていること、③愛嬌の良さとして捉えてきた行動の背景に言語的な概念の理解の未発達や、自己選択の経験の乏しさがあることに周囲が気が付かないまま年齢が上がり、それに伴ってダウン症児・者に対する周囲の評価が変化するために、不適応行動として捉えられるようになること、あるいはそのような環境の変化が影響してダウン症者自身が不適応行動を示すことの3点が考えられた。

菅野(2008)¹²⁾は『ニコッ』にごまかされないで、本人の個別の課題をしっかりと把握して目標を設定し、それをきちんとクリアさせていくべきであるとしている。これらのことから、このような社会的スキルの誤用について、周囲は気づき適切に対応していく必要がある。また、状況が理解できないことから免れることを積み重ねてきた結果、言語的な説明を理解が未発達であるという指摘(菅野;2008)¹²⁾や、自己選択をしてこなかったという指摘(小崎ら;2009)¹⁸⁾があるが、これらは実証されていないため、今後検討していく必要がある。

文 献

- 1) Dykens M.E.(2007) : Psychiatric and behavioral disorders in persons with Down syndrome. *Mental Retardation and Developmental Disabilities*,13,272-278.
- 2) Fidler J.D., Ballet C.K.,Most D.(2005) : Age-Related Differences in Smiling and Personality in Down syndrome. *Journal of Developmental and Physical Disabilities*,17,3,263-280.
- 3) Franco F., Wishart G.J.(1995) : Use of Pointing and Other Gestures by Young Children With Down Syndrome. *American Journal on Mental Retardation*,100,2,160-182.
- 4) Grieco J, Pulsifer M, Seligsohn K, Skotko B, and Schwartz A.(2015) : Down Syndrome : Cognitive and Behavioral Functioning Across the lifespan. *American Journal of Medical Genetics*,169,2,135-149.
- 5) Hahn J.L., Loveall J.S., Savoy T.M., Meumann M.A., Ikuta T.(2018) : Joint attention in Down syndrome: A meta-analysis. *Research in Developmental Disabilities*,78,89-102.
- 6) Hariis S., Kasari C. Sigman D.M.(1995) : Joint Attention and Language Gains in Children With Down Syndrome. *American Journal on Mental Retardation*,100,6,608-619.
- 7) 橋本創一(2013) : 特別支援教育におけるダウン症の子どもへのかかわりと学習活動. *小児看護*,36,10,1381-1387.
- 8) 伊麗斯克・菅野敦(2012a) : ダウン症児・者の「対人関係」に関する文献研究－研究動向と先行研究の分析を踏まえて－. *東京学芸大学紀要総合教育科学系 II*,63,263-275.
- 9) 伊麗斯克・菅野敦(2012b) : ダウン症候群の「対人関係」に関する研究－その困難性の分析を通して－. *東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要*,8,61-74.
- 10) John E.A., Mervis B.C.(2010) : Comprehension of the Communicative Intent Behind Pointing and Gazing Gestures by Young Children with Williams Syndrome or Down Syndrome. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*,53,4,950-960
- 11) 菅野敦・池田由紀江・上林宏文・大城政之・橋本創一・岡崎裕子(1987) : 超早期教育を受けたダウン症児の発達特性－津守式乳幼児精神発達検査法による検討－. *心身障害学研究*,12,1,35-44.
- 12) 菅野敦(2008) : ダウン症の「急激退行」に対する発達の理解. *みんなのねがい*,491,20-23.
- 13) Kaari C. and Freeman S.F.N.(2001) : Task-Related Social Behavior in Children With Down Syndrome. *American Journal on Mental Retardation*,106,3, 253-264.
- 14) Kasari C, Freeman S F.N. and Bass W.(2003) : Empathy and response to distress in children with Down syndrome. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*,44,3,424-431.
- 15) Kasari C., Freeman S, Mundy P., Sigman D.M.(1995) : Attention regulation by children with Down syndrome: coordinated joint attention and social referencing looks. *American Journal of Mental Retardation*,100,2,128-136.
- 16) Kasari C. and Sigman M.(1996) : Expression and Understanding of Emotion in Atypical Development: Autism and Down Syndrome. In M. Lewis & M. Sullivan (Eds.), *Emotions and atypical development*,109-130.
- 17) 古賀精治(2002) : ダウン症児の指さし理解の発達. *大分大学教育福祉科学部研究紀要*,24,1,193-204.
- 18) 小崎太陽・坂本彩・黒田吉孝・白石恵理子・久保容子・栗本葉子(2009) : 青年期知的障害者における「退行」等の臨床問題へのライフコース的視点からのアプローチ－青年期ダウン症の「急激退行」の検討を通して－. *障害者問題研究*,37,2,117-126.
- 19) 久保ゆかり(2017) : 社会・情動発達とその支援 第4章社会性の発達. 近藤清美・尾崎康子編著, *ミネルヴァ書房*,60-75.
- 20) 栗林万葉・岩立京子(2015) : 2歳児のユーモア行動の表出と共有過程. *東京学芸大学紀要総合教育科学系 I*,66,181-197.
- 21) 黒木美紗・大神英裕(2003) : 共同注意行動尺度の標準化. *九州大学心理学研究*,4,203-213.
- 22) Landry H.S., Chapieski M.L.(1989) : Joint Attention and Infant Toy Exploration: Effects of Down Syndrome and Prematurity. *Child Development*, 60,103-118.
- 23) Libby S., Powell S., Messer D. and Jordan R.(1997) : Imitation of Pretend Play Acts by Children with Autism and Down Syndrome. *Journal of Autism and Developmental Disorders*,27,4.
- 24) 松島恭子(1986) : ダウン症乳児の自己意識と他者意識の発達－他者への共感と対他行動の関連. *大阪市立大学生生活科学部紀要* 34,211-221.
- 25) McGhee P.E.(1999) : 子どものユーモア－その起源と発達. 島津一夫(翻訳), *誠信書房*.

- 26)Mechthild Rast and Andrew N. Meltzoff (1995):Memory and representation in young children with Down syndrome. Exploring deferred imitation and object permanence. *Dev Psychopathol*,7,3,393-407.
- 27)長崎勤・森村茂・切封由紀子・嶺野恵美子 (1989) : 認知・語用論的アプローチによる言語指導の試み(Ⅲ)ーダウン症児に対する集団ゲームを通してのコミュニケーション指導ー. *特殊教育研究施設報告*, 38,51-58.
- 28)Nielsen M. and Hudry K.(2010) : Over-imitation in children with autism and Down syndrome. *Australian Journal of Psychology*,62,2,67-74.
- 29)岡崎裕子(1991):ダウン症幼児の社会性の発達ー自己・他者認知を中心にー. *特殊教育学研究*,29,3,55-59.
- 30)岡崎裕子・池田由紀江(1985) : ダウン症乳児の発達特徴に関する分析的研究. *心身障害学研究*,9,2,65-74.
- 31)岡崎裕子・池田由紀江・長畑正道(1986) : ダウン症幼児の発達特徴に関する分析的研究(続報). *心身障害学研究*,10,2,65-74.
- 32)大神英裕(2002) : 共同注意行動の発達の起源. *九州大学心理学研究*,3,29-39.
- 33)Pitcairn T.K. and Wishart G.J.(1994) : Reactions of young children with Down's syndrome to an impossible task. *British Journal of Developmental Psychology*,12,485-489.
- 34)Ruskin E. M.,Kasari, C.,Mundy P. & Sigman, M.(1994) : Attention to people and toys during social and object mastery in children with Down syndrome. *American journal of mental retardation*,99,1,103-11.
- 35)斉藤ゆり・山下勲(1987):ダウン症乳児の模倣発達. *発達障害研究*, 8, 288-295.
- 36)Seagera E.,Mason-Appsb E.,Stojanovike V.,Norbury C.,Bozicevica L.,Murray L.(2018) : How do maternal interaction style and joint attention relate to language development in infants with Down syndrome and typically developing infants? *Research in Developmental Disabilities*,83,194-205.
- 37)建川博之(1968) : ダウン症候群(Down's Syndrome)の心理学的特性について. *東京学芸大学特殊教育研究施設研究紀要*,1,141-151.
- 38)Thurman J.A.,Mervis B.C.(2013) : The regulatory function of social referencing in preschoolers with Down syndrome or Williams syndrome. *Journal of Neurodevelopmental Disorders*,5,2.
- 39)常田秀子・古屋喜美代・西本絹子・田口久美子・長谷川明弘・浜谷直人・吉川はる菜(2002) : 学童保育所のダウン症児に見られる適応上の問題と援助. *日本教育心理学会総会発表論文集*, 44,461.
- 40)Vanvuchelena M.,Feys H.,Weerd D.W.(2011) : Is the good-imitator-poor-talker profile syndrome-specific in Down syndrome Evidence from standardised imitation and language measures. *Research in Developmental Disabilities*, 32,148-157.
- 41)Wishart G.J.(2007) : Socio-cognitive understanding: a strength or weakness in Down's syndrome? *Journal of Intellectual Disability Research*, 51,12,996-1005.
- 42)Wishart J.(1993) : Learning the hard way: Avoidance strategies in young children with Down's syndrome. *Down Syndrome Research and Practice*,1,2,47-55.
- 43)Wright I., Lewis V. and Collis M.G.(2006) : Imitation and representational development in young children with Down syndrome. *British Journal of Developmental Psychology*, 24, 429-450.